

平成17年度 第2回大阪商業大学大学院 公開講座

## 「地域」とは何か

### 近畿と関西を通して考える

## 講演 「上方そして関西」

— 京阪神地域ブランドとしての関西 —

大阪商業大学大学院  
地域政策学研究所  
研究科長 成 田 孝 三

**成田** ただ今紹介していただきました私の研究内容ですけれども、本日は、世界都市まで話を拡大することはできず、足元の関西を中心に置きながら少しお話をさせていただきますと思います。

### 近畿と関西の混用

ただ今、金坂先生の報告によりまして、私たちの所属している地域の一つであります近畿、あるいはそれ以前の畿内、そして現在の近畿地方とか近畿圏、そういうものの成り立ちとかあるいはそれぞれがどういう意味を持っているのかというふうなことをいろいろご説明いただきます

た。

しかし、私たちは近畿に属していると同時に関西にも属している。たとえば今朝出がけにテレビをみておりますと、今夜ガンバ大阪とセレッソの試合がある、それに勝てば、関西で初めてJリーグの優勝者が出るのだというアナウンスがありました。そこには関西という言葉が出て来た。近畿でという言葉ではないわけです。そのように関西と近畿というのは我々を包み込む、とても頻繁に使われる地域の名称でありますけれども、そこには何かニュアンスの違いがあつて、意味が違うのではないだろうか。何が違うのか。その辺がどうもはっきりしない。漠然としています。

私はその漠然とした状態をもう少し分解してはつきりさせることによつて、一つの地域政策というか地域の振興のための鍵（かぎ）が出て来るのではないか、そういう発想から、今日のお話をいたしたいと思つてゐるわけです。

結論的に言えば、金坂先生がいろいろとご説明なさいましたように、近畿というのは官製の、国家が作った言葉であります。近畿地方は行政上、政治上の用語であります。だがそれだけに尽きない、その背景には、住民の帰属意識とか自然とかそういうものがあるのだというのが金坂先生の強調された点であります。しかしそういう領域を近畿地方という言葉でもって一般に普及させ、教育の場でも使っておりますのは、それは国の力、国の方針であります。

それに対して関西というのは、国が作った言葉ではないわけです。関西という言葉は、後で触れますけれども歴史的に古く使われた言葉であります。けれどもそれは何となく理解され使われた言葉であつて、公式の国家の文書で関西という言葉が出て来たことはないわけです。そのところに、実は大変重要な意味があるだろうというのが私の発想の原点でありまして、その辺のことをこれから少しお話ししたいと思います。

レジュメに沿つてまいりますけれども、まず今言いましたように、関西と近畿というのは非常によく使われながら、明確な区別なく何か混用しているきらいがある。それについて千里にあります国立民族学博物館の館長をなさつておられました石毛さんという方が、日本経済新聞のコラムの中で近畿がどうして成り立つてきたかという、いま金坂先生がお話なさいましたようなことを簡単に述べながら最後の結論として、新聞の同じページに近畿と関西が同居していてもややこしい、関西というのはいったいどこなのかと、さじを投げたような言葉でそのコラムを結んでおられます。

関西というタイトルを付した文献は非常にたくさんありますので、私はまずそういうあまたの文献の中で、関西というものがどういうエリアとしてとらえられているのか検討してみました。そういたしますと、金坂先生がご説明なさつたいわゆる近畿地方、近畿の中核部分、あるいは

都市的な部分をつかまえて関西という表現を与えている文献がいくつかあります。

先ほど申しました新聞の一つのページに近畿と関西が同時に出て来るといふ、石毛さんの引用された日経新聞の最近版があります。その三九頁は近畿という見出しがついています。この紙面が近畿経済を扱った紙面であるという意味での近畿です。ところがそのトップは、アジアと関西という記事で始まっているわけです。その他にもこの紙面には関西同友会、関西空港、関西経済連合会と関西を冠した記事が並んでいます。一方、同じ紙面に「近畿の建設業者スクラム」という記事が出てまいります。こういうかたちで一つの新聞社の紙面に近畿と関西が同居している。なぜ近畿という大見出しのもとにアジアと関西という記事が出て来るのかということ、日経新聞に質してみたのですが、担当者には明確な答をしませんでした。以心伝心というか、何となくおわかりいただけるだろうということ、日経新聞に質してみただけのことです。そこで、端的に言えば、近畿の中核部分の経済活動を主眼にしてという時には関西という表現を与えているのかと質してみますと、そうはつきりはおっしゃらなかったけれども、そういうニュアンスの回答をしておられました。

### 諸文献における広狭の関西

先ほど申しましたように、関西という言葉を表紙に使っているさまざまな文献が、果たしてどの地域を論じているのか。それを一覧表にしてみました。皆様のレジュメの中にもとじ込んでございます。ちょっと見にくいかもしれませんが、まずそのAのグループ、つまり近畿の中核部分の都市的などころを関西と呼んでいる文献がいくつかございます。たとえば、小松左京という作家がおられます。小松さんは、自分の本の書名を『こちら関西』（文芸春秋社、一九九四年）としておられますけれども、その内容は大阪を中心にして京都と神戸について論じております。つまり小松さんの頭の中で、関西は京、阪、神という三つの都市をつなげたような範囲だということ、それが想定されます。日本経済新聞社『2000年への関西』（一九八五年）ではやや広く、京阪神と奈良、和歌山、滋賀の都市部を扱っております。さらに国土庁『21世紀の国土ランドデザイン』（全国総合開発計画、一九九八年）でも関西圏を、京阪神圏を中心として大津市、奈良市、和歌山市、及び関西文化学術研究都市等を含み一体となった都市圏を構成する近畿地域の中核、と位置づけています。

それに対して、もう少しエリアを広げて、先ほどらい説明されました近畿の全域とかそのある部分をとらえて関西を論じている文献が沢山あります。狭いものから順番に並べますと、まず二府四県（京都、大阪、滋賀、兵庫、奈良、和歌山）を関西とするもの。これには日本経済新聞社『関西経済の100年』（一九七八年）、関西経済連合会『関西経済再生のシナリオ』（一九九九年）、大阪自治体問題研究所『関西再生への選択』

(自治体研究社、二〇〇三年)等が含まれます。それに対してもう一県(主に福井県)プラスして二府五県を関西として論じている文献が幾つもあります。関西経済活性化センター『関西活性化白書』(各年)、日本経済新聞社『アイラブ関西』(保育社、一九八六年)、日本経済新聞社『関西新産業論』(一九九三年)等がそれです。なお少数ですが三重県を加えた二府六県、すなわち行政上の近畿圏を関西とするものもあります。21世紀の関西を考える会『20世紀の関西』(二〇〇〇年)がそれです。現在国が範囲としている、従って国の統計書に出てくる近畿は二府四県ですが、それに福井が入るのは、おそらく旧通産行政が繊維産業の関係で関西とつながりが強かったということで、近畿通産局の管轄に福井が入ったという背景があるからでしょう。また三重県が入るのは、三重県の伊賀地方を水源とする木津川水系が淀川を経て大阪湾に流入しており、近畿地方建設局の管轄に三重県の一部がくいこんでいるという背景があるからでしょう。

関西を最も広くとらえた文献は、さらに徳島県を加えた二府七県を対象としています。産経新聞大阪本社編集局『超・関西宣言』(ブレインセンター、一九九四年)、21世紀の関西を考える会『21世紀の関西のグランドデザイン』(二〇〇〇年)、関西経済同友会『都市進化を目指して』(二〇〇〇年)等がそれです。さきほど金坂先生が天気予報で関西という場合に徳島が入ると指摘された範囲です。

このようにこれまで関西の用語が表現してきたエリアは広狭さまざまです。いったいそのいずれが正しい関西なのか、あるいは全てが関西なのか、行政上の近畿に一致する二府四県や五県を扱っているのになぜ関西と表現するのか、区域は同一でも扱っている内容が異なるためなのか、といった疑問が沢山出てくるわけです。そのあたりを少し考えてみようというのが本日の私の問題意識です。

### 先行研究がとらえた「関西」の変遷

そこで、このややこしい関西がどうして成り立ち、どういう範囲を歴史的に関西としてとらえて来たのかを知る必要がありますが、それについては今さら私が調べるまでもなく非常に多くの研究蓄積があります。

レジュメの二ページ目に列挙しましたように、多くの経済史家や歴史家が関連する著書を書いておられます(末尾の文献参照)。私は歴史の専門家ではありませんので、そういう著書によって、諸先学がどのようにこの問題を理解してきたのか、それを最初にまとめてみました。

### 中世西日本を意味する関西

まずレジュメのA、「西日本を意味する中世の広域の関西」という見出しですけれども、関西という言葉よりも早く文献に現れた地域的な名

称として関東という言葉があります。これは先ほど金坂先生も少し触れられましたけれども、畿内という範囲を限るポイントとして四至がありその畿内と畿外を区別する重要な施設として関が設けられました。鈴鹿、不破、愛発（あらかち）の三関がそれで、三重県、岐阜県、福井県という畿内の東を限る重要なポイントに位置しました。その関より東が関東、関の東でありまして、歴史的にはそれを関東と呼んだわけでありま

す。その場合の関東の意味するところは、畿内の外でありますから、我々の現代的な言葉では辺境の地であります。畿内に比べていかにも開発が遅れている地域だとして、関東という表現がまず与えられたのです。

ところが関西という言葉がいつ頃出て来たのかと言いますと、『吾妻鏡』という鎌倉幕府の事蹟を編年的に編纂した歴史書がありまして、その一八〇年の条に関西という言葉が初めて出て来るのです。それは頼朝が富士川の合戦で勝利した直後に使用した言葉です。つまり富士川で関西の軍を破り、ただちに関西に攻め上がるという頼朝の意向が出て来たわけでありませんが、それを諫めて、まず関東を固めるべきだという話から、関東に對置して関西という言葉が使われている。だがその場合の関西はまだはっきりした領域を指す言葉ではなくて、関の西側、まだ幕府が成立する前段階ですが、鎌倉勢から言えば関を越えた向こう側です。そこにはもちろん朝廷があり、日本のセンターであったわけですが、そこに攻め込もうという意志の表示が関西に上ろうということに使われたのです。

しかし文献の中で、もうちょっとはっきりした言葉として関西が出て来るのはいつか。空間的な範囲を明示して関西が使われたのは、やはり『吾妻鏡』の一二〇三年の条でありまして、ここでは全国を関西三八国と関東二八国に二分している。要するに関の西、西日本全域を関西と呼び、関の東全域を関東と呼んでいる。日本を二分する名称として、関西と関東が使われていた、それが中世の初めの頃の関西の意味でありました。そのように西日本全域を指す関西という言葉は、その後あまり頻繁には出てまいりませんが、中・近世を通して使われていたというのが歴史家の証言であります。

### 近世西日本の中核地域ブランドとしての上方

その次にレジュメのB、「西日本の中核部分を意味する近世の上方」という見出しの部分について。関東は当初、関の東の東日本全域を指したわけですが、江戸幕府が成立しますと、東日本の中でも江戸を中心とする地域が非常に重要な意味を持つてまいります。そこで東日本全域を指す関東の用語がどんどん縮まってまいりまして、その中核部分を示す関八州（相模、武蔵、安房、上総、下総、常陸、上野、下野）

だけを関東という言葉で呼ぶようになります。

それに対応させて西日本（関西）の場合には、西日本全体でなくて、もうちょっとまとまった西日本の中核部分をどう呼んだかということが問題です。その場合は、関西を縮めて中核部分のみを関西というのではなくて、関西にはすでに先ほど来お話がございましたように畿内というとても重要な意味のある、そして便利な用語があったわけです。だから関東に対して畿内という言葉を使う、普通に言えばそうなるのではないかとと思われます。しかし江戸時代には、江戸幕府が実権を握って、京都の朝廷が実質的にエリアをコントロールしていたわけではないのです。それなのに畿内という言葉を用いることは、やはり江戸幕府に対しても何となくはばかられる、そういう思いがあったのかどうかはよくわかりませんが、歴史的に朝廷がコントロールしている直轄の地の畿内という言葉を避けて、それに領域的にはとてもよく似ているけれども、中身は政治的中枢・中心ではなくて、文化的、歴史的な中枢である、あるいはもう少し時代が下がって幕末期になってきますと、それは流通、経済的な中心にもなるわけですが、経済と文化の中心という意味を込めて上方という言葉であてたのではないかと私は想定しています。それにつきましては、歴史家の先生方はなぜ上方という言葉を使ったかということをおっしゃっておらずに、実質上、京都の文化や大阪の経済の発展を表現する用語としてそれを使っているのだと説明されております。私はエリアとして畿内に代わるものとして上方という言葉を使った、ある意味ではそれは今日のテーマであります。畿内の持っていた名称の効果を上方と呼び換えて、地域のブランドとしてそれを使ったのだというふうな解釈をしているわけです。

### 近代における関西の縮小論

次にレジュメのC、「西日本の中核部分を意味する近代の狭域の関西」という部分について。近代になってこの上方という地域の表現を関西という言葉に転換して使っているというのが私の解釈です。そのあたりを直接さういふかたちで論じたわけではありませんが、とても重要な論証をした足利健亮という歴史地理の研究者がおります。

先ほど金坂先生も触れられましたが、この足利さんは私と一つ違いの同窓でありましてとても親しい友人であったのですが、六年前に病で倒れ亡くされました。本来の先生の仕事は古道の研究で、学位論文もそれについて書かれたのでありますけれども、その先生が関西についても示唆に富む優れた論文を書いておられます（足利健亮「関西の区域」、京都大学近畿圏総合研究会『近畿圏』鹿島出版会、一九六九年所収）。

そこでどういふふうに足利さんが関西を処理されたかと言いますと、明治の初年から中、後期までの日本で刊行されました新聞の記事を精査されまして、そこで出来事の発生場所を関西という用語を用いて報道している記事を逐一整理されました。そこから、関西の範囲についての意識が次の三段階から形成されてきたという見解を導いたので。

まず明治の初年頃には、非常に広く西日本全域、九州の記事にも関西という見出しをつけて新聞記事が構成されていた。ところがだんだん関西という言葉で表現する地域の範囲が狭まって来て、最終的に多くなってくるのは、近畿の範囲、さらに、現在我々が想定している関西、近畿の中心部分になったということです。その理由として足利さんが指摘しておられますのは、西日本全域を関西というほどに、畿内あるいは上方と続いて来た関西の中核部分の力が強かったのだけでも、次第に九州、中国、四国など西日本の諸地域が自ら力を蓄えて独立してきた。他方、東のほうでは愛知の部分までも関西としてこれまでは処理、認識されてきたのに、東京の力がどんどんと西に及んで来て、中部地方にその勢力を伸ばして来た。今や中部は関西から離れていったというふうなことで、地方の成長と東京の成長のはざままで、関西⇨西日本のエリアは現在の関西というところにどんどんと狭まってきた。それが足利説です。

それから文献的に言えば、宮本又次というとても有名な経済史家がおられました。その宮本さんの著書によりますと、東日本⇨関東⇨坂東⇨江戸というふうな地域的なまとまり、圧縮が一方にある。それに対置されるものとして関西⇨上方⇨大阪というまとまりが成立してきたとおっしゃっているのですけれども、なぜそういう表現が現れてきたのかということについての十分な説明はなさっておりません。

私はあまり根拠のはっきりしない二人の先生方の説明、広がっていたものが狭まって、つまり言葉は悪いですけれども外圧というかたちで関西が指し示す範囲が狭まってきたという立場や説明には疑問を持ちます。それではなくてもっと積極的に、上方という一つのブランドが使えなくなりました。つまり先ほど金坂先生が触れられましたように、明治二年、皇居が東京に移るわけです。まさに東京は、言葉で言えば皇居のある上方なのです。それなのに関西で上方という表現を用いていることは、やはり時代錯誤である、現実には合わない。だけれども、関西には古い文化的な伝統もあり、経済的な実力も備わっている。何か上方に代わるいい表現を与えなければいけないというふうなところから出て来たのが関西です。それは歴史的には西日本全域を指していた古い言葉なのですけれども、江戸⇨東京を中心凝縮されて来た関東に対立する概念として、自ら関西という用語を選択した。狭められて関西を使ったのではなくて、首都関東に対して、なおかつ我々は非常に活力のある歴史と伝統のある地域を維持している、それが関西だという意気込みでもって関西という用語を使ったのではないか。誰が初めて関西を使ったかということを引きつちりと把握しておりませんので、そう言い切ることはなかなか難しいし、自信もないのですけれども、今のところは何となくそういうふう

に考えております。もしチャンスがあればそういうことを調べてみたいし、皆さんの中で何かヒントがあればまたご教示いただきたいと思ひます。

そういう経緯で、実質あるいは形式、あるいはそれをもたらした力にはやや解釈の違いがあるにしても、現在の関西が西日本全域でなくて非常にコンパクトな、先ほど見たように少なくとも近畿と混用されるような範囲に収まってきている。そのところでもう少し関西のエリアを明確にできないかという動きは当然出て来るわけですけども、それについて先ほどご紹介いたしました足利さんが、やはりとてもおもしろい分析をしておられます。

まず昭和四二年頃の電話帳を繰りまして、東日本は多分当初から除いたと思いますが、中部以西の主要な都市で関西という言葉で冠した事業所がどれだけ分布しているかということ調べました。これはとても時間がかかり大変な仕事だったと思いますが、それに基づいて分布図を作成しました。都市別の絶対数を見ますと、京阪神を囲む楕円状三角形の核心地に圧倒的に関西を冠した事業所の数が多いのですけれども、しかし九州にもあるし北陸にもあるというかたちで非常に広く西日本全域に分布しているわけです。

更に絶対数だけでなく、都市の総事業所に占める関西名事業所の比率を足利さんは関西度という言葉で表現したのですけれども、各都市の絶対数と関西度の大小を考慮してグルーピングを行い、四つのエリアを区分しました。上記の核心地の外側で、ほぼ滋賀、京都、大阪、兵庫、岡山、香川の六府県に広がる第二圏、更に若狭、三重、奈良、和歌山、中国と四国の大部分を覆う第三圏、それに東は愛知、岐阜、富山まで、西は九州全域に及ぶ第四圏です。

私はこの論文が出た当初はなかなかうまい処理をしているというふうに感じたのですけれども、もう少し考えてみますと、足利さんの地図で中・四国や九州に関西を名乗る事業所が多く出て来るのは、その中に、たとえば関西〇〇銀行九州支店というふうに、関西企業の支店や出張所等がたくさん含まれておりまして、足利さんは支店や出張所と本店との区別をせずに使われているからです。本当の関西そのものを追究するためには、そういう支店や出張所を除いて、関西を名乗り本格的に関西で活動している本店・本部事業所の立地をとらえないといけないと思ひました。核心部や第二圏に立地している関西名事業所の多くはおそらく本店・本部に該当するはずですよ。つまり第三圏や四圏はこの核心地域の関西の活動が支店や出張所を開設しながら伸びて行った部分、我々の言葉で言うならば、それは関西の勢力圏、関西圏と呼ばれる地域であって、関西そのものではないというふうに、私は足利さんの業績を少し批判的にとらえるようになりました。

それから足利さんはもう一つ別の図を作っておられます。それは、関西を冠する団体（例えば関西スポーツ連合）や大企業（例えば関西電

力)と、域外の日本を冠する団体(例えば日本機械輸出組合)や大企業(例えば日本交通公社)の関西支社・支部(総数三三)に対して、その管轄(営業)範囲ないしは加盟団体の所在範囲についてアンケートした結果を図化したものです。ここでも四つのエリアが区分されており、それが、それは関西の勢力圏の濃淡を端的に示すものといつてよいでしょう。そしてこの四つのエリア(管轄圏)は先の関西名事業所の分布から得られたエリアと極めてよく似ているのです。違いは管轄圏の第二圏が奈良と和歌山の二圏を含み、岡山と香川の二圏を含まないという点だけです。つまり二つの図は共に関西の範囲でなく、関西圏を示すものだと解釈できます。

### 現代の「関西」の確認

足利さんはこの二つの図を実質的な関西がだんだん縮小してきたことの証として使われたわけですが、私はもともとこれは関西圏を意味しているに過ぎなくて、実質的な関西がこういうふう広がっていたのではないという立場です。そうしますと実質的に関西はどこなのか、それを自分で解かなければなりません。その場合に注意しなければならないのは、私が関西はここだというふうに分属地域を自ら描くと同時に、それが説得力を持つためには域外の人々が関西といえればあのだというふうな認識を持つこと、つまり内外で関西と認められる範囲が成立して初めて、そこは本当の関西になるということです。内と外からどういうふうに関西が規定され考えられているか、それをできれば実証しなければならないということです。

そこでまず一つの資料をとりあげます。これは私が作ったものではなくて、日本経済新聞社の『関西の挑戦』(一九九〇年)という本に掲載されたものです。近畿二府四県以外に住む、つまり外部の人々が、関西の範囲をどうイメージしているかという図を示している図です。ただこの図をご覧になる時に注意しなければならないのは、数字の回答者が二七二人であるということ。そして域外に住む有識者にアンケートしたということが書かれているだけでありまして、その有識者たるものがどういう人であるのか、アンケートを採った全対象がどれだけであったのか、そして回答率が何パーセントであったのか、そういうことがわからないということです。最初にここであいさつされました本大学の谷岡学長は、統計が非常に間違った理解を生む、間違いの元を作る統計には注意しなければならないという、とても有益でおもしろい新書を書かれています。いま申しましたように、私はこの図を見る時にもそういうことを考えなければいけないとは思いつつも、手元にこれに代わるような有効なデータがありませんので、まずこれを借りてみました。図で網目が入った四つのエリア、京都、大阪、兵庫、奈良の二府二県を関西というようにイメージする答は八八%から九八%に達して、断然近畿の他の地域よりは多いわけです。外部の有識者が関西と言え、この二府二県の

範囲を想定しているという一つの手がかりが得られるわけです。

一方、外部認識ではなくて内部の人々が、関西をどういう範囲としてとらえているかが第二の問題です。ここに挙げました京阪神に住むサラリーマンが認識している関西の表は、とてもずさんで学術的に使えない表ですけれども、これも日本経済新聞社の『あいらぶ関西』（一九八六年）という書物に文章で出していた数値を、私がこういう表にしてみました。この場合もいったいどれだけのサラリーマンに聞いて、どれだけの回答率があったのかさっぱりわからない。だから資料としては、信頼性のない、価値のおけないものでしょうけれども、手元にある、使えるものはこれしかないということで、ここではこれを出してみました。

京阪神の大都市圏を関西と考える人が四五%、近畿二府四県が四二%。そして大阪が一%あります。京阪神大都市圏と大阪という二つの都市部を関西ととらえている人が、五六%に達しているわけです。

こういう二つのデータから想定できることは、関西が近畿全域つまり近畿二府四県、二府六県、二府五県ではなくて、その中核の京阪神を核とする大都市地域だということに、内外の一定の人々は考えているということです。

加えて、それだけではあまりにも心もとないということで、もう少し関西の範囲を特定化するための作業を行いました。これは足利さんが使われた電話帳を、私流に使い直してみたものです。足利さんは膨大な電話帳を繰って、大変時間をかけ苦労してあのデータを作られたと思えますけれども、私の場合はインターネットのヤフーの電話帳で検索し、キーワードに「関西本社」を入れますと府県別に数値がさっと出て来ます。さらにそれを細かく検索すれば市町村別にもぱっと出て来る。そういう簡便な方法を用いてこの作業を行いました。お手元の図がその結果であります。

まず、関西という団体名称を掲げた団体の所在地を全国の都道府県別に調べますと、東日本には一件もありません。愛知県に一件あるのですが、これは関西吟詩文化協会という団体でありました。それから岡山にも一つあるのですけれども、こちらは関西書芸院という習字の団体。実態がどういふのか電話帳だけです。それ以上追跡して調べておりませんのでよくわかりません。しかしながら関西という名称を冠して活動しているほとんどの団体は、近畿に集まっていることがはっきりします。

ついでに関西の企業ではなくて、関西以外に本社を持っている企業が関西に出している支店、支局、支所を拾い上げてその分布を見たわけです。つまり域外の企業はどの地域を関西というふうに判断しているか、認識しているかを取り出そうとしたわけですが、やはり近畿に集中しているわけです。両者はとてもよく似ております。

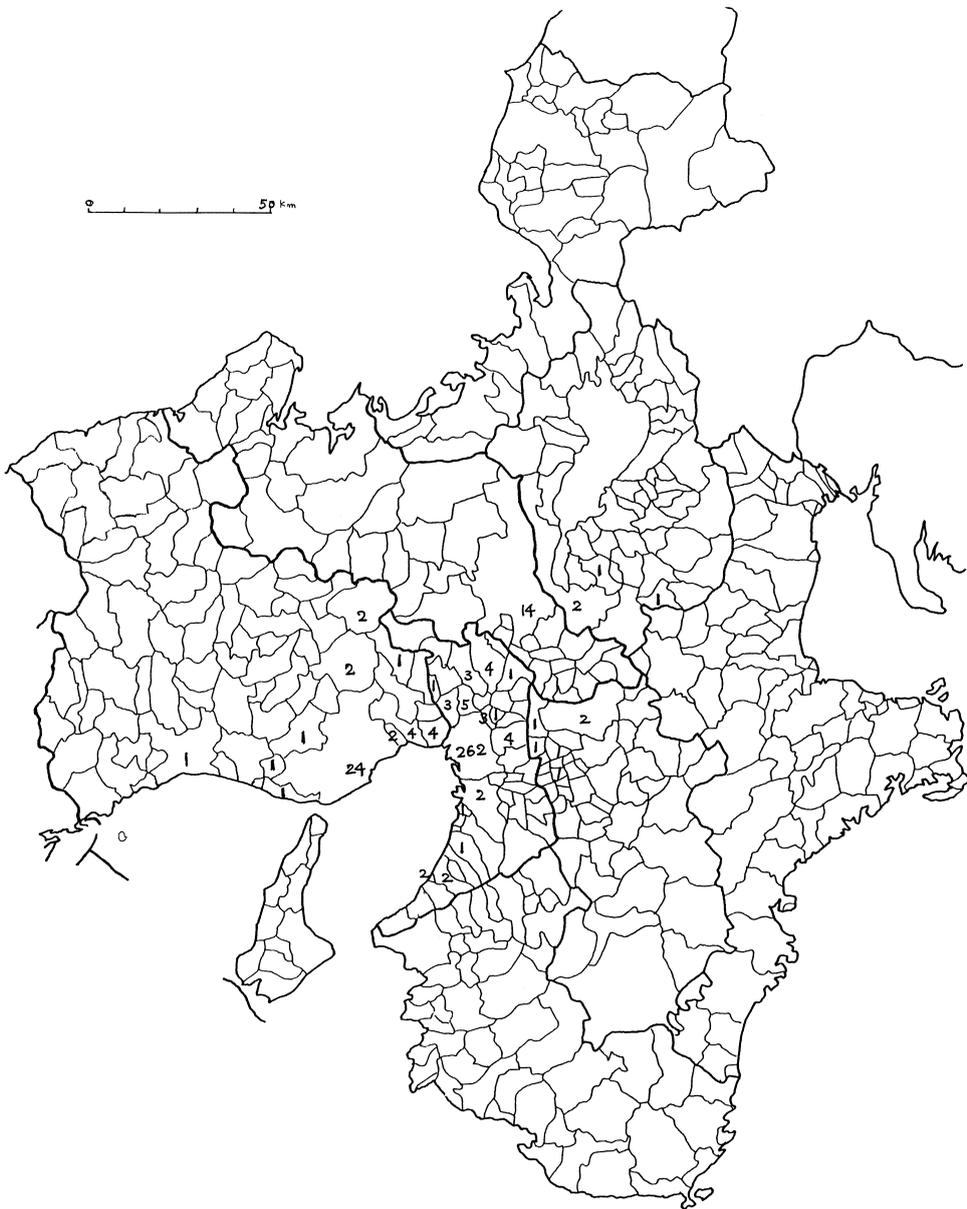


図1 関西名団体の分布

さて、日本全体の中に占める関西意識というものを示すために、こういう全国図で見てみたわけですが、それも、それをもう少し細かく、近畿の中でどの範囲なのかを市町村単位で追跡したのが二枚の図です。図1は団体の分布図ですが、簡単に言ってしまうと、京・阪・神と、その間に介在している市に関西という名の付く団体、オフィスが集中していると言えます。考えてみれば当たり前なことですが、それを実証するというようなあまり有意でないかも知れないことを、我々研究者はやってみるわけです。

それから先ほどの外部の企業、主として関西に支

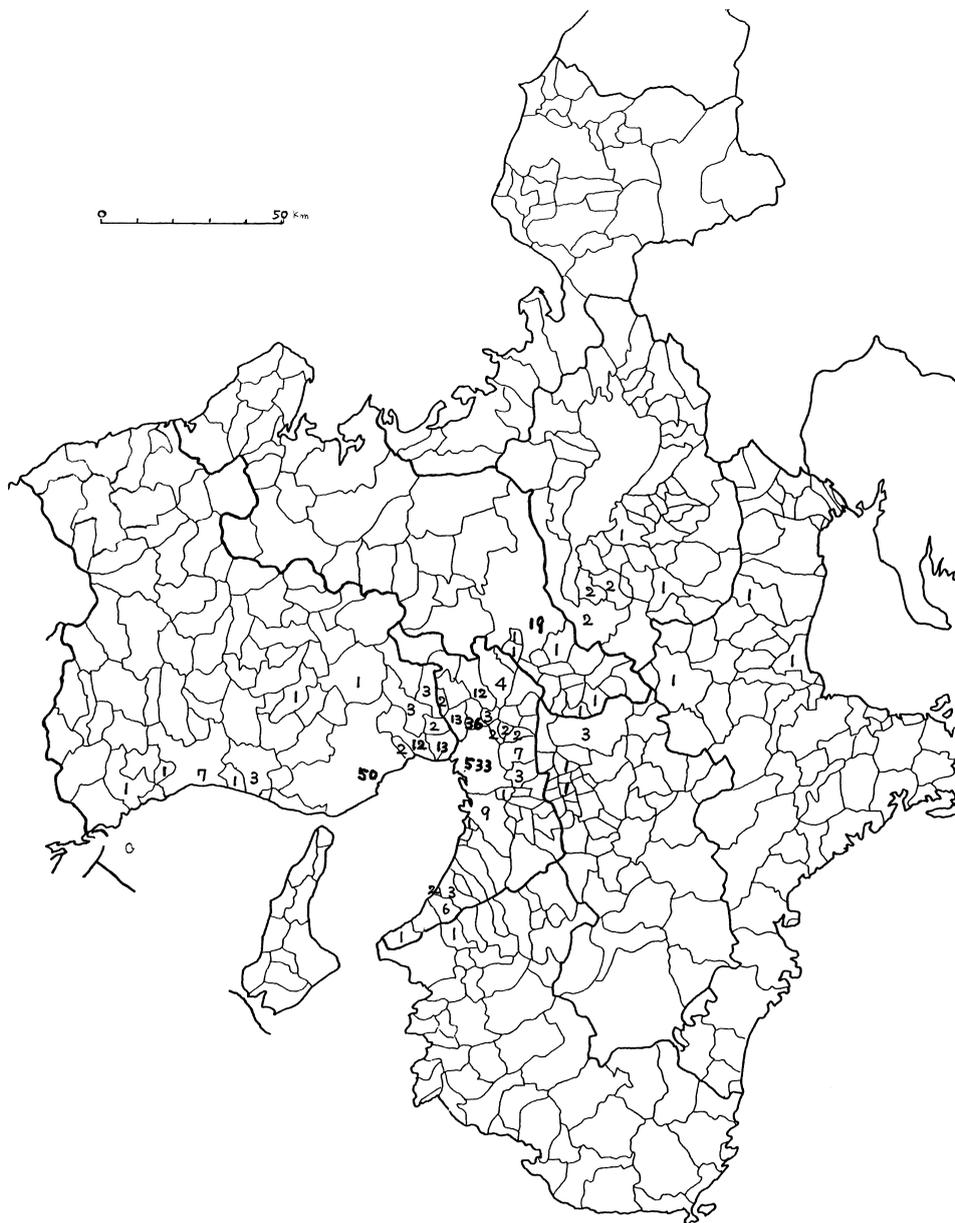


図2 域外企業の関西支社・支店の分布

所、支店を持つわけですから中堅以上の大きな企業だと思えますけれども、それがどこを評価して関西支店を置いているかを示したのが図2です。先ほどの関西本拠の団体の分布よりもさらにコンパクトに、京阪神とその周辺に集まっております。要するに京・阪・神の三市、それをつなぐ都市地域に関西系の団体あるいは外部企業の関西支店、支所が集合しているということが実証されたわけです。

### 地域としての関西

私は、関西というエリアを追究していると先ほど来申し上げて来たところでありますけれども、内外の人々がイメージしている関

西の範囲と、それから、実質的に経済活動を営んでいる団体や企業が拠点として意識している関西は、京阪神を核とする大都市地域ということではほぼ一致しているところまで来たわけだ。

ところで、金坂先生の紹介のところでも少し触れましたけれども、地域というのは単一の現象だけで範囲を限ることも可能なわけで、たとえば行政の力が及ぶ範囲である行政域も一つの地域です。だけれどもそれに多様な要素がどんどん加わって来て、もしそれらが行政域内でまつまっている場合、つまり地域の中身を構成する要素が多ければ多いほど、その行政域は本当の意味と違うか実質的と言うか、高次の地域だといふふうには解釈しております。

つまり単一の事象（指標）だけで、たとえば人口密度の大小、あるいは気温の高低、あるいは土地の高低差でもって区切ったエリアも一つの地域ではありますけれども、それらは非常に単純な地域です。そこにどういうまとまった経済活動や人々の生活が営まれているかということが検証された場合、単純な地域はより意味のある高次の地域になると私たちは考えるのです。

そこで関西というエリア、地域を考える時に、今まで見て来たような内外の人々のイメージとか経済活動の本拠の立地とかいう指標に加えて、人々の活動の範囲がどういふふうには展開しているかということを見る必要がある。それがレジユメで言えば五ページになっているでしょうが、「団体、会社の活動を支える人々の分布範囲、京阪神圏・関西」といふふうには書いてある部分です。

つまり、先ほど見たように、京阪神の都市的な地域に関西的な活動が集積しているわけですが、その活動を維持しているのはそこに勤めている人々でありまして、その人々は家庭を持ち、平日は半日を、休日は一日を家庭で過ごし、自分たちの家族の生活を維持しているのです。だから、関西の活動を支えている人々の生活が展開している範囲がいったいどこか、それを確かめる必要があります。

そのためにやりました作業の一つとして、今まで見て来たような京阪神中枢部の企業活動に従事している人々がいったいどこに住み、どこからやって来ているか、いわゆる通勤圏を明らかにしました。なぜ通勤圏を使ったかと言いますと、パーソナルトリップ調査というものがあります。これは人々が一日中どういう目的でどこに移動したかということサンプルでもって調べあげた非常に膨大で貴重な調査です。それはもう何回も関西を含む日本の主要な都市圏で行われてきました。その結果を分析してみますと、通勤以外の目的で買い物に行ったり、親戚に行ったり、娯楽に行ったりといふふうな人々の一日の動きがあるわけですが、それらの動きと通勤の動きがとてもよく似ているのです。ある地域の人々が一番多く通勤する市町村、その次の市町村、その次と、一から三番目ぐらいまでランクを付けて並べますと、通勤以外の目的で人々が訪問する市町村の順位もほとんどそれと一致してくる。だから通勤圏というのは、人々の様々な生活の圏域を代表する性格をもっていると言えます。

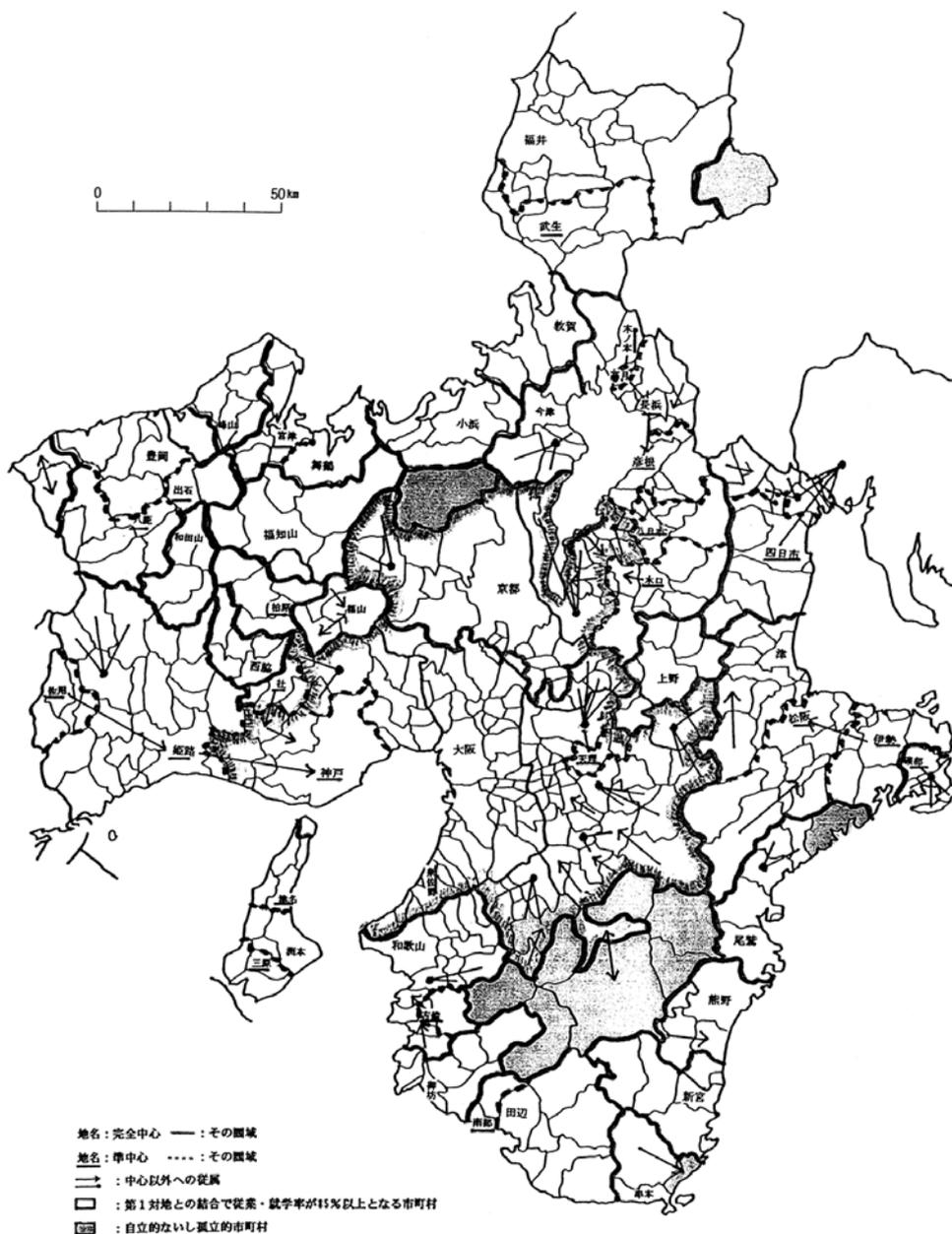


図3 1995年の京阪神圏

す。そういうことから京都・大阪・神戸三都市を第一の通勤先とする市町村の範囲を示したのがレジュメに添付した京阪神圏（図3ケバ）によって囲い込んだ部分）です（成田孝三「近畿の日常生活圏と諸領域」、平成八～十年科学研究所補助金研究成果報告書『地域システムの動態に関する比較・総合研究』一九九九年）。この図の作成にはいろいろの約束があるのですが、煩雑になりますのでそれは省略して、結論だけを申しておきますと、ここで得られた京阪神圏は先に示した関西名

団体や関西支店の分布範囲に近似しています。それはまた、先ほど金坂先生が示されたランドサットから撮影した近畿の図の中で連続的に広がる赤色の都市化地域に対応します。いま一つ、レジユメに添付した京阪神圏の地域構造図を見てください。この図は俗に五全総といわれる「21世紀の国土ブランドデザイン」をうけて策定された国土交通省『大都市圏のリノベーション・プログラム』（二〇〇一年）に収録されたものですが、ここに示された京都・大阪・神戸の三都市圏の範囲もまた、私の京阪神圏とほぼ一致します。因みにこの京阪神圏をブランドデザインでは関西圏と呼んでおりまして、政府の地域政策文書に「関西」の名称が登場するのはこれが始めてであり、それだけ関西の重みが加わったと言えるのかも知れません。

### 地域ブランドとしての関西

だいたい私の結論は、前にも申しましたように、近畿の中核部の大都市地域が関西だということでもありますけれども、なぜそこを関西という言葉で呼んだか。それを示すのがこの講演の副題「京阪神地域ブランドとしての関西」です。つまり関西は地域の名称であるだけではなくて、ブランドとしての意味を込めている。単なるある範囲を指す地域名称ではなくて、今やブランドである。レジユメの最終部分はそのことを説明しています。

中・近世はさておき、近・現代においても、官製の地域呼称「近畿」に對置して民製の地域呼称「関西」が使われた意義についての注目すべき見解があります。一つは先に紹介した足利健亮さんの次のような見解です。明治の初期にはまだ西南日本全域という広域を指した関西が、実は東京を中心とした地域と京阪神を中心とした地域との間の地位の逆転の過程と対応する関係にあるのではないか。たとえば、「上方風」という言葉で意をつくし得た諸現象をあらわすのに、いつしか「関西風」という言葉がもちいられるようになった。転換の過程に、地域間の浮沈の影が宿っているのではないか。

次いで、国際日本文化研究センターの井上章一氏も、民度の高い文明圏が「畿内」であつたのに、今では「畿内」や「近畿」がすたれ、「関西」が普及しだしている。この現状は、関西地方が文化の中心から辺境へ落ちていったことを物語る。「関西」という言葉の隆盛そのものが、この地の衰退を示している、と述べています。

だが私は、両氏のこうした地位の逆転説を採りません。明治初年に西日本を関西と表現したのは、日本の東西を区分した歴史的用語をそのまま使用したままで、京阪神の勢力が西日本全体に及んでいたことを意味するわけではありません。当時の東京の新聞が九州の出来事を報じるの

に関西の語を使用したのはその例です。明治中期に官制の地域呼称として中国、四国、九州が成立すると、もはや西日本を関西という呼称で表す必要がなくなったのであって、用例の減少が勢力の後退を意味するものではありません。

ではなぜ先に確認したように京阪神を核とする都市地域（京阪神地域）を関西と称するようになったのでしょうか。畿内・上方の文化的伝統を受け継ぐとともに、果敢な企業家精神を持つ群像が資本主義を開化させた（日本経済新聞社『関西経済の百年』一九六八年）京阪神地域を、官制用語の近畿や府県名によって表現することは出来ない。この地域に相応しい呼称として、首都のある関東を意識して、プライドをもって関西を自称したのだと私は考えるのです。すなわち上方が近世の畿内地域のブランドであったように、関西は近・現代の京阪神地域のブランドであると考えられます。これまで関西が明確な区域の規定なしに多用されてきたのもそのためでしょう。多くの有力民間団体がその名称に関西を冠し、上方歌舞伎のブランドを保持すべきは関西歌舞伎だといわれ、個性と伝統と先進性をもつ近畿の農業を関西農業と称している（奥村栄一・高橋信正編『おもしろい！関西農業』、昭和堂、二〇〇四年）ところにも、地域ブランドとしての「関西」を読み取ることができます。

この地域ブランドということについて、もう少し補足しておきます。

今年の秋に日本都市学会の大会が岩手県の盛岡市で開催されましたが、そのメインテーマは「地域ブランドを目指したまちづくり」でありました。何をねらってそういうテーマを掲げたか。「地域ブランドを目指したまちづくりは、まちの持続的発展を可能にさせる要因を見つけ出し、そこで育まれた地域固有の資源をブランドとしていかに形成されるかという戦略課題を内包している。それは地域固有の資源を原石として磨き上げ、この輝いた石の光をその地域はもとより他地域の人々との共有財産としていく戦略を持つことが必要である」と趣意書では説明しています。要するにブランドを輝かせて、その地域のイメージを人々に植え込んで、地域の発展につなげていこうというのが町づくりの戦略であります。盛岡を含めまして全国の各地は、いかにして地域ブランドを確立するかということで、いま一生懸命活動しているわけですが、私から言わせれば、我々は幸いなことに関西という著名なブランドをもう手にしているのです。

それは過去、戦前から戦後の二〇年代まで非常に大きな輝きを持っていたわけです。東京、関東には一步も引けを取らない確固とした繁栄の地であり、伝統文化の地であった。関西と言えば、多くの人はそれでいろいろなプラスの性格、他のどの地域よりも豊かな歴史性、伝統性、多様性、複合性、進取性、先進性、創造性、革新性、解放性、国際性等々の優れた特性をイメージしました。だから関西企業、関西経済というふうな言葉が多用されてきたわけです。

だけれども、二〇世紀後半からその関西というブランドに地盤沈下とか停滞といわれるかげりが出て来て、同時に、下品、野卑、好色等とい

うイメージが加わったのです。だから、もう一度輝きを取り戻すことが今日の政策課題となっています。そこで注意すべきは、関西ブランドは京阪神を核とする大都市地域をトータルに表現しているということです。つまり、京・阪・神が個々ばらばらでは、関西ブランドを輝かせる力にはなり得ない、三者が連携し一体となって活動することが必要なのです。その点を最後に説明いたします。用いるのはかつて私が論文で用いたデータです（成田孝三『転換期の都市と都市圏』地人書房、一九九五年、三四頁）。まず都市イメージに関するアンケートに対する関西の有識者三二人の回答をみます。京都、大阪、神戸、東京の四都市について一項目の性格の有無を尋ね、夫々で最高の回答を得た都市を列挙します。京都は知性・伝統性、大阪はあたたかさ・庶民性・活発さ・合理性、神戸は洗練性・豊かさ・国際性・ファッショニ性・明るさ、東京は活発さ・合理性で最高となっています。関西三都市についての評価としてはほぼ妥当と言えるでしょう。しかし、関西人の身量で、東京は実際より低く評価されている感じがします。そこで東京、横浜、千葉、浦和四都市の住民七二人（五〇〇人にアンケートしたが回答が少ない）の回答で最高を得た都市を取り上げます。京都はあたたかさ・豊かさ・知性・伝統性、大阪は庶民性・合理性、神戸は該当無し、東京は洗練性・活発さ・国際性・ファッショニ性・明るさとなります。さきの関西人の評価に比べると京都が過大に、神戸が過少に評価されているように思われます。それはともかく、関西の三都市が個別に東京と競うと太刀打ちできないけれども、一体となって競えば過半数の項目で東京を凌駕していることが分かります。これが関西活性化戦略の要であることを強調して私の話を終わります。

**司会** どうもありがとうございます。だいぶ時間が過ぎてしまいましたが、先生にぜひお伺いしたいということがありましたら、お一方どうぞ。

**質問者** 時間がありませんので簡潔に、先生ありがとうございます。いい勉強、ご講義をお受けいたしました。私たちが漠然として考えていた弱さのはっきりわかりました。私は選挙単位が一つのあれかな。たとえば市とか府、国会ということで、あまり近畿ということが弱かったですけれども、また関西ということも弱かったです。

私は間違いかも知れませんが、小さい時に関ヶ原から天下分け目ということで、関東、関西というふうな頭を持ってからそれが今までどかなくて、今日誤りであったということがよくわかりました。そういう考えは誤りであろうと思うし、ご指摘を願ったと思います。

それから今日の先生の結論ですが、近畿は一つとか、広域行政は大事また関西の意義もわかりましたけれども、私たち市民が、先生がいま結論としておっしゃったブランドとか関西経済ということですが、市民がこのように勉強をして学ぶことも大事ですが、たとえばそ

ういうふうな関西の意欲をもう少し広げていくという運動を今後考えていったらいいか、質問にならないと思いますけれども、私たちの考え方をもう少し教えていただいたらと思います。

**成田** 私も実際の運動体として、関西の活性化のために市民レベルでどうしたらいいかということについては、まだいい考えは持ち合わせておりません。けれども、輝いていた関西のイメージを壊すところの逆の逆のイメージ、関西というのは、言葉は悪いけれども下品であるとか、これまでの非常に高尚なエリアではない否定的なお笑いの関西であるとか、ダジャレの関西であるとか、犯罪の温床が関西にあるとかの悪いイメージが今どんどん出て来ているわけです。だから、市民一人ひとりが、そういうマイナスのイメージを打ち破るような生活行動を絶えず心して貫いていくということが、小さい努力ではあるけれどもとても大事です。

それと同時に、今はたくさん作られている関西を良くする会といったものができるだけ参画してそれを盛り上げていく。だけれども究極的には、やはり市民一人ひとりが自覚と自信を持って関西ブランドを高めていくことがとても大事ではないかと思っております。答にはなりませんけれども。

**司会** もうちょっと質問を出しているいろいろ聞いてみたい方も多いと思いますけれども、だいぶ時間が過ぎましたので、また最初に私が申しました地球都市との関係で言いますと、最後に提案していただいたような気がしております。これで成田先生のご講演を終わりたいと思います。どうもありがとうございます。(拍手)

引き続きまして最後に副学長より閉会のあいさつをいただきます。片山先生お願いいたします。

**片山** 今日は金坂先生をお迎えいたしまして、関西、近畿の話をじっくりと聞いていただいたというふうに思います。いちばん最後に成田先生が言われました住まいする住民一人ひとりが、やはり自分の生活行動をとという言葉は非常に重いし、意味のあることだというふうに受け止めました。

実は成田先生は、京都大学を定年退官されて、本学大学院の研究科長として今日まで活躍をしてくださいましたが、ご定年で来年の三月をもってこの大学を去られます。成田先生と私たちは本当に親しく交流させていただきましたが、学者として毅然として院生の指導、院の運営にあたられたというのが私たちの強い印象であります。今日は皆様方と一緒に、成田先生の最後の講義を聞かせていただいたという思いを強くいたしております。

関西という言葉、今日先生は京阪神ということでしたが、京都・大阪・神戸、そこに住んでいる者にとっては、また特に私は

門外漢ですが、関東に行きますとその関西というものを強く感じますし、よく私が小さい時に母から教えられたのは、「京の着倒れ、大阪の食い倒れ、神戸の履き倒れ」というそれぞれの三つの都市の特性を、非常に簡潔な言葉で教えられたことがあります。そういうものを関東に行った時に感じますし、エスカレーターを上る時にどちら側に立ったらいいかというのも思いをする時があるわけです。

そういう端々の生活の中で、私たちは関西を意識してきました。また近畿を感じたことがあります。今日は両先生に、その点をしっかりと学問的な立場から説明していただき講義をいただいたというふうに思っております。改めて皆さんと一緒に、お二人の先生に御礼の意を込めて拍手をしたいと思えます。よろしく願います。(拍手)

長時間にわたりました。ご清聴いただきましてありがとうございます。本学大学院の公開講座秋の会、これをもって終了いたします。どうもありがとうございます。(拍手)

**司会** 先生、どうもありがとうございました。これをもちまして平成一七年度第二回の公開講座を終了したいと思います。お寒い中、長時間にわたりご清聴いただきましてありがとうございます。これで終わりたいと思います。

(平成一七年一二月三日開催、於 大阪商業大学ユニバーシティホール蒼天)

